

マルクスの経済本質論に関する一考察

杉 原 四 郎

—

「時間の経済、すべての経済は結局はそこに解消される」。これはマルクスが一八五七―八八年に書いた草稿『経済学批判要綱』の中に見出される文章である。『要綱』は一九五三年に東ベルリンのディーツ社から出版されることになってわれわれも利用できるようになったが、わたしは、前著『ミルとマルクス』(一九五七年二月)において、この文章を中心とするマルクスの主張を、彼の経済本質論を端的に表明したものととして訳出・紹介した⁽²⁾。これはただちに大熊信行教授の注目するところとなり、教授はその著『経済本質論』の新版(一九五七年五月)の序文でマルクスのこの所論をとりあげ、時間の配分に関する教授年来の主張とマルクスの所説との親近性に強い興味をしめされた⁽³⁾。その後『要綱』のこの部分に言及した内外の諸文献として、たとえば、フリッツ・ベーレンスは一九六〇年五月におこなったマルクス記念講演の演題にマルクスのこの文章をそっくり借用しているし、⁽⁴⁾木村正身教授や岡田純一教授もマルクスの経済本質論を考察した論稿の中で、『要綱』のこの主張に強い関心をしめしておられる。⁽⁵⁾わたし自身も前著の

刊行以来このような諸家の業績に刺戟されつつ、この文章を手がかりとするマルクスの経済本質論の体系的な究明をこころざしてきたのである。一体これまでマルクスの経済本質論が考察される場合には、『経済学批判』の序説——『要綱』のこの部分はずで一九〇三年『ノイエ・ツァイト』に公表されていた——を手がかりにして、生産・分配・交換・消費の一般的関係を中心になされるか、あるいはマルクスがクーゲルマンへあてた一八六八年七月十一日づけの手紙の中でのべた労働配分の法則をめぐって論ぜられることが多かった。しかし前者の場合は、マルクスの敘述が非常に抽象的であって、本質論と経済理論との関係をなかなか見きわめにくいし、後者の場合には労働配分という視点だけでは経済の静的均衡と動的発展とを統一的に把握することはむづかしいように思われる。また最近の初期マルクス研究の進展に刺戟されて、マルクスの人間観乃至労働観の原型を一八四〇年代前半の諸論稿に見だし、それにもとずいてかれの経済本質論を構成しようとする試みもなされているが、かれの思想の哲学的契機と経済学的契機とが具体的な統一性を端的に示している初期マルクスの特質は、同時に研究者の問題意識にしたがってさまざまな主観的・一面的な解釈を生み出させる危険性をはらんでいて、マルクスの思想の全体像を、すなわち哲学と諸科学とのすべての側面にわたって、また初期から後期への発展を一貫して、統一的に展望しようとする経済本質論を構成することとは、いまだ将来の課題としてのこざれているように思われる。このような課題にとりくむための重要な手がかりをこの『要綱』の箇所があたえているというのがわたくしの確信であるが、本稿はそのような確信をかためてゆくうえの覚え書の一つとして書かれたもので、『要綱』のこの箇所のもつ理論的含蓄を一そうあきらかにするために、マルクスが他の個所でのべている所論のいくつかを参照しつつ、若干の考察をこころみただけである。

- (1) Marx, K., *Grundriß der Kritik der politischen Ökonomie*. Dietz Verlag, Berlin, 1953. この文章はその八九ページに見える。なお現在大月書店から高木幸二郎教授の監訳が進行中で、本稿でもその訳文を参照した。以下『要綱』からの引用のページ数はドイツ版のものをアラビア数字でしめす。
- (2) 杉原四郎『ミルとマルクス』一五〇ページ参照。
- (3) 大能信行『経済本質論—計画経済学の基礎』一六一—七ページ参照。
- (4) Behrens, Fritz, „*Ökonomie der Zeit, darin lost sich schließlich alle Ökonomie auf.*“ Akademie-Verlag, Berlin, 1960. これには「社会的労働の利用効果の測定に関する一考察」という副題がついている。
- (5) 木村正身「人間労働の対象化規定と分割規定——『配分』問題の一視角——」(『香川大学経済学部研究年報』(1)一九六一年)、岡田純一「『資本論』における人間の問題」(本位田教授記念論文集『西洋経済史・思想史研究』・一九六二年)を参照。

二

問題の文章は、『要綱』の中の「貨幣に関する章」のノートI(一八五七年十月執筆)に出てくる。すなわちマルクスは、労働が交換を通じてはじめて一般的なものとして措定される「個人の自立した生産」の場合を、個人の労働がはじめから社会的労働として措定されている「共同的生産」の場合と比較し、前者の場合は「個人の労働も彼の生産物も直接には一般的なものでないということ、彼の生産物は**对象的な媒介**によって、生産物とは異なる貨幣によって、はじめて一般的な形態を獲得するということ

を、まさに前提している」(傍点は原文ゲシュペルト。以下おなじ)とのべたあと、後者の場合について書き加えているのである。⁽¹⁾

「共同的生産 (*Gemeinschaftliche Produktion*) を前提しても、時間規定 (*Zeitbestimmung*) が依然として本質的な

意義をもっていることは当然である。社会が小麦や家畜などの生産に必要なとする時間がすくなくなればなるほど、より多くの時間が、それ以外の物質的ならびに精神的な生産のために獲得されるわけである。個人にとっても同様に、社会全体にとってもまた、それが、享樂の面でも行動の面でもすべての面で發展しえるかどうかは、時間の節約 (Zeitersparung) にかかっているのだ。時間の経済 (Ökonomie)、すべての経済 (Ökonomie) は結局はそこに解消される。社会はその全体的欲望 (Gesamtbefürnisse) に即応した生産を達成するようにその時間を合目的に配分 (einteilen) しなければならぬが、それはあたかも個人が、適当な比率で知識を獲得したり、彼の活動に對する種々の要求を満足させたりするために、彼の時間を正しく配分しなければならぬのと全く同様である。したがって時間の経済は、生産の種々な部門への労働時間の計画的配分と同様に、依然として共同的生産の基礎となる第一の経済法則 (erstes ökonomisches Gesetz auf Grundlage der gemeinschaftlichen Produktion) である。それは明らかに、はるかに高い程度においてさえ法則となるのだ。これはしかし交換価値 (労働または労働生産物) の労働時間による測定とは本質的にことなる。同一の労働部門における個人々の労働、および様々の種類の労働は、量的にことなるのみならず質的にもことなっている。物の単に量的な区別はなにを前提しているか。その質の同一性をである。したがって労働の量的測定は労働の質の同格性、同一性を前提している。⁽²⁾

以上の文章を通じてマルクスがいわんとするところをわたくしの言葉で敷衍しつつ論理的に整理してみるとつきのようなになる。

(一) 個人にとっても社会にとっても、その種々な欲望を満足させるために総時間を種々な用途に適当に配分する必要がある。この場合の時間配分の必要性というのは、物質的生産にふりむけられる労働時間だけについてでなく、そ

れをも含むより一般的な、人間の処分しうる時間全体についていわれることである。

(二) このような意味での時間配分において、小麦や家畜などの生活資料の生産に必要な時間、すなわち必要労働時間が、まず第一に確保されなくてはならないことは当然である。ところで個人にとっても社会にとっても、各種の用途にふりむけうる時間の全体量には一定のわくがあるから、この必要労働時間の部分が多ければ多いほどそれ以外の用途にふりむけうる時間がすくなくなり、それだけ人間の欲望の多面的な充足が制約されることになる。逆にこの必要労働時間がみじかければみじかいほど、人間の生活に時間的余裕が生じ、この余裕の成立によってはじめて時間配分という前記の課題が実質的な意味をもつことになる。

(三) 物的富の再生産にかかわる経済活動は、人間生活にとって最も基礎的であるが、人間の多面的な活動のうちの一部分にすぎず、本来の目的からみれば手段的性格を脱却しえないものである、しかも人間はその処理しうる時間とエネルギーとを可能性としては経済的活動にも非経済活動にもふりむけうるものである。してみれば人間の労働は、それがどのような具体的形態をとっていようと、一般的にこれを時間としてとらえるかぎり、もし必要労働時間がもっと短縮できれば非経済的活動にあてられたものをあえて経済活動にふりむけざるをえなかったものとして、人間にとって本来的な費用なのであり、したがってそれは当然できるだけ節約されなくてはならない。有限の時間を多様な欲望にふりむける以上、時間の合理的な配分と使用との必要は形式的には経済の部面のみならずあらゆる部面にいうることであろうが、とりわけそれが経済にとって本質的なのはこのような理由による。費用としての、節約されるべきものとしての労働「時間の経済、すべての経済は結局そこに解消される。」⁽³⁾

このような見解はいわばマルクスの思想的核心であって、とくにわれわれにとって重要なことは、それが彼の価値

論や剰余価値論を生み出した基盤でありかつそれらをささえている支柱として、はたらいっているということである。労働が価値の源泉でありその尺度であるというマルクスの主張は、決して単に商品生産社会にかなっただけでなく、経済一般に通ずるものとしてなされているのであるが、こうした主張は、人間生活にとって最も本源的な資源として時間があるということ、労働時間がその時間の基底的部分を構成するということ、そして生活時間から労働時間をさしひいたのこりの自由時間によって人間の能力の多面的な開発が可能となること、したがって労働時間短縮が人間にとって最も重要な課題とならざるをえないということの認識をまっしてはじめて成立することができる。そうしてこのような認識にもとづいてはじめて、労働の生産力の発展が人間の歴史をつらぬく基本方向であり、総労働時間の欲望に応じた配分が、各社会体制を通ずる根本法則であるという展望もひらけうるのであろう。生産力の発展と合理的な時間配分とは、労働時間の節約のための二つの本質的な解決策にはかならないからである。⁽⁵⁾

このような内容と意義をもつマルクスの思想的核心的特色を、以下主として『要綱』の他の箇所での敘述を参考にしながら一そう明確にしてゆきたい。

- (1) *Grundrisse*, SS. 87—89. 編集者はこの節に「一般的等価としての労働時間」という名称をあたえている。
- (2) *Grundrisse*, SS. 89—90. 編集者はこの節に「労働時間と共同的生産」という名称をあたえている。
- (3) マルクスが「時間の経済」という場合の時間とは労働時間のことである。だがそれが人間にとって節約されるべきであるのは、それが労働時間として人間の処理しうる時間の中の一部であるからである。大熊信行教授はその著『社会思想家としてのラスキンとモリス』（一九二七年）の中で、モリスの快楽的労働観やジェボンスの労働苦痛説との関連で自己の労働観を展開しているが、その所論の要点は、労働が費用であるのは労働が苦痛であるからでなく、労働の提供そのものが費用であるからであること、なぜ労働の提供そのものが費用であるかというに、それは労働が分量上有限な時間の割愛であること

にもとづくということであり、このように解することによってはじめて、労働それ自身が快楽であれ苦行であれ、それにかかわらず費用と考えることによって、労働を正当に価値論の根底に与えることができることもに、労働以外の生活活動と労働との均衡を問題にしうる展望がひらかれるということであった(同書Ⅱ第三「労働快楽説の経済純理への干渉」八九—一一〇ページ参照)。こうした所論を出発点としてその後時間配分を基軸とする経済本質論を一貫して展開してこられた教授が『要綱』のマルクスの文章に注目されたのは当然であった。経済本質論と労働価値説との基本的関連をいあてたものとして、教授の所説はマルクス解釈としても活用することができるであろう。さらに教授が最近家族および人間の再生産という観点の強調を通じて客観的な必要の概念の確立を提唱しておられること(前掲『経済本質論』計画経済学の基礎』二九七、三〇八ページ参照)は、マルクスの経済本質論が、必要労働と剰余労働との概念を通じて、労働の本質と慾望の体系との相関的発展の論理を解明しているのと思ひ合わされて興味ぶかいものがある。

(4) マルクスの価値概念が決して商品生産社会にのみ局限されるものではなく、経済の本質にかかわるものであることを解明してもっともくわしいのは、おそらく白杉庄一郎教授であろう(白杉『価値の理論』一九五五年、とくに七九、二二六—二四五ページ参照)。ところで白杉教授の場合、労働が価値の源泉であるのは、「単に、労働が労働力の支出として人間にとり一種の犠牲を意味するからではなくて、同時にそれが人間にとって有用なものであるからである」すなわち労働が「生産的・有用的活動一般である」かぎりにおいてであるとされる(同書五〇ページ)。そして教授において労働が一種の犠牲を意味するとされるのは、「なるほど、経済的労働は、それ自身目的として妥当するような人間能力の発展そのもの——いわゆる精神的文化活動——にくらべ、その条件ないし手段の生産にかかわるものとして、たしかに、人生の犠牲といわねべき側面をもつ」(同書五二ページ)からであって、労働の時間そのものが有用であり犠牲であるからではない。この点前註で見た大熊教授の所説とことなるのであって、この見地から、白杉教授は、単なる時間をもって諸財獲得の普遍的手段とするところの、時間を最も本質的な生活實力とするところの、大熊説を、「行き過ぎ」とし、「私の理解力を超える」とする(同一一五—一六ページ)。だが人間の労働を効用獲得のための最も本源的な代価であり、最も一般的な欲望充足手段とされる白杉教授の所説(同一〇七、一三一ページ)を一步徹底させれば大熊説との対立は解消するのであり、この一步はマルクスの見地からしても、決して行き過ぎではないのではなからうか。

(5) 内海義夫教授はマルクスの労働時間法則に関する所説を解明した論稿の中で「人間の歴史の各発展段階は、その経済構造にマルクスの経済本質論に関する一考察(杉原)

規定されたそれぞれに固有の労働時間法則をもっている」とのべている（内海『労働時間の理論と問題』一九六二年、三一ページ）。たしかに労働時間の長さを規定する諸要素、すなわち人間の諸欲望、労働の生産力、社会成員への労働負担の配分があるといつてよい。だがそれと同時に、およそいかなる時代においても人間にとって労働時間のもっている本質的な意義は共通したものがあり、この本質的な意義にてらしてはじめて、各時代の特殊性も把握されうるものであり、時代から時代への推移の必然性も理解することができるということも、わすれてはなるまい。マルクスが『資本論』の各所で資本主義社会における労働時間の特殊なあり方を浮彫するため、それ以外の社会でのあり方との比較をこころみているが、このような比較の根底には、本稿でとりあげるようなかれのいわば労働時間本質論がよこたわっているのである。マルクスの労働時間法則に関する見解がその重要性にもかかわらず従来あまりかえりみられなかつたことは内海教授の指摘される通りであるが、その原因は、かれの労働時間に関する基本的見解とそれを核心とする経済本質論とが、これまでほとんど問題にされなかつたことにもあるのではなからうか。なお大島雄一氏が「社会発展のための本源的経済法則」の一契機として「労働節約の法則」をあげていることが注目される（大島「経済学体系と資本主義」〔『経済科学』九巻一号・一九六一年八月・一二五ページ〕）。

三

まず最初に、『要綱』の「資本に関する章」第二篇「資本の流過程」の中からつぎの文章をとり出してみよう。

「真実の経済 (die wirkliche Ökonomie)——節約 (Ersparung)——は労働時間の節約にある。(生産費の最低限と最低限への縮減)。だがこの節約は生産力の発展と同義である。したがって決して享受 (Genuss) の断念ではなく、生産のための力 (Power) の諸能力の発展であり、従って享受の能力ならびに手段の発展である。享受の能力は享受のための条件でありしたがってそのための第一の手段であり、そしてこの能力は個性的な才能の発展であり、生産力である。労働時間の節約はとりもなおさず自由な時間、すなわち個人の完全な発展のための時間の増大であり、こ

9

の発展はそれ自身ふたたび最大の生産力として労働の生産力に反作用する。それは直接的生産過程の立場から見る
と固定資本 (capital fixe) の生産とみなすことができる。というのはこの固定資本は人間自身 (man himself) だか
らである。それどころか、ブルジョアの経済の立場からはそのようにあらわれるような、直接的な労働時間自身が
自由な時間との抽象的対立にとどまりえないということも明白である。労働は、フリーエののぞむように遊戯には
なりえない (ただしフリーエには分配ならぬ生産様式自体のより高次の形態への止揚を究極目的 (ultimate object) として宣
言したという偉大な功績はのこされる)。自由な時間——余暇時間であると同時により高次の活動のための時間でも
ある——は、当然そのもち主をこれまでとはちがった主体に転化させてしまい、彼は今やそうした別の主体とし
て直接的生産過程にも入ってゆく。この生産過程は、形成されつつある人間について見れば訓練 (Discipline) であ
ると同時に、すでに形成された人間について見れば、実行 (Ausübung)、実験科学、物質的に創造的な自己を対象
化する科学であって、形成された人間の頭脳の中に社会の蓄積された知識が存在している。この両者にとって、農
業の場合のように労働が実践的な執行と自由な運動とを必要とするかぎり、同時に体育 (exercise) である。」⁽¹⁾
この文章で注目されることは、経済の課題としての労働時間の節約は、享受の断念を通じてではなく生産力の発展
を通じて実現されるべき点であるとしている点であるが、生産力のない手でありその発展の主体である人間の立場か
らすれば、自由時間と労働とは決して無関係なものでも両立しえないものでもなく、本来的にはいずれも人間形成に
とって積極的意義をもっており、相互媒介的に生産力の発展とそれを通じての労働時間の短縮に貢献しうるとのべて
いることが重要であろう。生産と消費、労働と欲望との相互依存的関係については、『要綱』の序説、とくに(一)「分
配・交換・消費に対する生産の一般関係」の中の生産と消費との関係をとりあつたところで抽象的、一般的に論

じられているが、その敘述は、序説という性質上当然に、非常に形式的で具体的な内容がきりとられているため(2)にきわめて難解である。われわれはそこでのべられている生産と消費との三重の同一性や生産が消費を包摂する契機であることの意義を、上掲の文章のテーマである自由時間と労働時間との関係にかかわらせて考えるなら、その理論内容を一そうよく理解することができるであろう。

つぎにこの文章の中で労働の人間にとつての積極的意義が強調されており、フリーエの所論に言及されているが、このような労働の性格については、『要綱』の同じく「資本に関する章」の第二篇の別の箇所(3)で、スマスが労働を安息と自由と幸福との犠牲としてとらえていることを批判しながらよりくわしく説明されている。すなわちマルクスによれば、人間は正常な状態では「労働と安息の止揚との正常な持ち分への欲求をさえもっているということ」、また外部から与えられた障害の克服を通じての「自己実現、主体の対象化」としての労働は人間の自由の実証という意義をもっていることをスマスは全く理解していない。(4)だが労働が魅力的な労働、個人の自己実現となるといっても、このことはなにも、フリーエが浮気なパリ娘のようなひどい素朴さで理解しているように、労働がたんなるおどけや、たんなる娯楽となるようなことを決して意味しない、真に自由な労働、たとえば作曲は、同時にまったく大変な真剣さ、はげしい努力なのである。(5)このような労働の本質に関するスマスとフリーエとの見解に対するマルクスの両面批判の意義を考えるためにも、上掲の文章は示唆的であるといえよう。(6)労働の社会的性格が指定され、労働が科学的一般的な労働という性格をもちうる共同的生産の世界においても、すべての財が自由財にならないかぎり、そして精神的労働もまた時間とエネルギーとの支出をとまなうかぎり、時間の経済は依然として基本的経済法則たることをやめないであろう。

最後に、この文章は、自由時間と労働時間との対立の止揚が現実に実現されるのは、階級対立そのものの止揚の實現をまっけてはじめて可能であつて、現実の世界すなわちブルジョアの経済においてはその対立面が現象せざるをえないことを指摘している。この点は『要綱』の他の箇所でもくりかえし強調されていて、たとえばノートⅣのある註は階級社会では「一方での剰余労働の創造に、他方での負の労働 (Minus-Arbeit)、つまり相対的な怠惰 (またはせいせい不生産的労働) の創造が対応している」ことを指摘し、「剰余労働および剰余資本とともに、生産しないで消費する剰余有閑人 (Surplusidlers) の要求を、すなわち浪費、奢侈、饜飪などの必要をかかげるマルサスは、全くすじが通っている」とのべているが、ここではノートⅦの中のつぎの文章を、その代表的一例として引用しておくことにしよう。

「社会一般と社会のすべての構成員にとって必要な労働時間以外の多くの自由に分できる時間 (disposable time) (すなわち個々人の、したがつてまた社会の生産力を十分發展させるための余地) の創造、非労働時間のこのような創造は、資本の立場からすれば、すべての先行段階と同様に、わずかのものにとつての非労働時間、自由な時間としてあらわれる。資本の附加するのは、資本は大衆の剰余労働時間を芸術と科学のあらゆる手段を通じて増加させるということである。なぜなら資本の富は直接に剰余労働時間の領有にあるからである。資本の目的は直接に価値であつて、使用価値ではないからである。……だが資本の傾向はつねに、一方では自由に分できる時間を創造することであり、他方ではそれを剰余労働に転化することである。……富の尺度としての労働時間は、富それ自体を貧困のうゑに立脚するものとして、また自由に処分できる時間を剰余労働時間との對抗のなかで、またそれを通じて実存するものとして措定する。すなわち一個人の全時間の労働時間としての措定、したがつてその個人のたんなる労働者

への墮落、労働のもとへの包摂だ。だからもっとも発達した機械は、いまや労働者に野蛮人よりも、あるいは労働者自身ももっとも簡単な、もっとも粗野な道具をもっていたときよりも、より長時間労働することを強制する。⁽⁶⁾ 階級社会にとって本質的な労働時間と自由時間との対立が、資本主義社会にいたって最も尖鋭化する次第がここに簡潔に語られている。産業資本による絶対的ならびに相対的剰余価値の生産過程は同時にこの対立を止揚する客観的ならびに主体的諸条件を成熟させてゆく過程でもあることをあきらかにすることが、『資本論』の一つの主眼点であることは、前著で詳論した通りであるが、われわれはここにマルクスの経済本質論と剰余価値論との連繫を把握すべきであろう。

- (1) *Grundriss*, SS. 599—600. これは一八五八年二月末から六月はじめにかけて執筆されたノートⅦの中にある。マルクスはこの節に「わたし自身のノートへの心覚え」の中で「真実の経済—経済—労働時間の節約—生産力の発展。自由な時間と労働時間との対立の止揚」という表題をつけている。*Grundriss*, S. 563
- (2) *Grundriss*, SS. 11—16.
- (3) *Grundriss*, SS. 504—505.
- (4) 『資本論』第一巻第一節第一章の註一六でもスキシスの労働—安息犠牲性が批判されている。*Das Kapital*, Dietz, 1953, S. 51. なお『要綱』のこの箇所について、東独の教育学者クラップは、その著書のなか(Dの5のa)「労働の人間の形態」でくわしく解説をなしている。Krapp, Gotthold, *Marr und Engels über die Verbindung des Unterrichts mit produktiver Arbeit und die polytechnische Bildung*, 3 Auflage, 1960, Berlin, SS. 143—150. 大橋精夫訳『マルクス主義の教育思想』一九六一年、三〇一—三一七ページ参照。
- (5) *Grundriss*, SS. 304—305.
- (6) *Grundriss*, SS. 595—596. マルクスは「わたし自身のノートへの心覚え」の中(S. 563)で、この部分について「自由に処分できる時間、それを創造することが資本の主要な規定。資本におけるこの時間の対抗的形態」という見出しをつけている。

なお一八五九年の「プラン草案」の中の「価値増殖過程」のなかにも“Disponible Zeit”の一項がおかれていることは注目にあたいたす。Grundriss, S. 971.

(7) 杉原『ミルとマルクス』第一部第三章および第四章を参照。

四

今かかげた文章において surplus labour とか disposable time とかいった重要な用語が英語で表現されているが、これはディルク Charles Wentworth Dilke (1789—1864) が一八二一年に匿名で公刊した四〇ページのパンフレット『国民的苦難の原因と対策⁽¹⁾』からマルクスが借用してきたものである。彼はこれを一八五一年の七月にブリテイシュ・ミュージアムの図書室でよみ、抜萃帳にノートしたのだが、そのノートを『要綱』にも利用して、「十二時間間の労働のかわりに六時間の労働がなされると、一国民は真実に富むのである。富とは剰余労働時間ではなくて、すべての個人と社会全体のための直接的生産に使用された時間以外の、自由に処分できる時間である」というディルクの文章をくりかえし引用している。⁽³⁾『要綱』の中にはこのパンフレットに関するマルクス自身の解説や批評はみあたらないが、『要綱』より数年の後にかかれた『剰余価値学説史』をよむと、われわれはマルクスがいかにディルクを高く評価していたかを知ることができる。すなわちかれは『学説史』第三卷の第二十二章「(リカードウ的理論に立つて)経済学者達にむかつての反対」のはじめにこのパンフレットをとりあげ、これは「ほとんど知られていない」けれども、そこには「リカードウにくらべて本質的な進歩がある」こと、それは「これがはじめてすべての剰余価値を剰余労働に還元し、剰余価値を資本利子とよんでいるものの、資本利子のもとに剰余労働の一般的形態を、その特殊の形態たる地代、貨幣利子、産業的利潤と区別して理解している」からであるとして、⁽⁵⁾剰余価値学説史上の画期的功績を指摘

したのち、「一国民は十二時間でなく六時間はたらくとき真実に富んでいるのだ。富は自由（der schöne Satz）に処分（der schöne Satz）しうる時間であつてそれ以外の何物でもない」という文章を「すばらしい文章」（der schöne Satz）として引用している。もっとも著者はこの文章の真の意義をみずから気づいていないとして、マルクスはこの文章の意味しうるところを、つぎのように説明している。われわれはこれによってマルクスの経済本質論の特質と、それが彼の剰余価値論をささえるヴィジヨンとしてはたらいっている所以を明らかに把握することができるであらう。

「もし万人が労働しなければならず、はたらくすぎる者とのらくら者との対立がなくなるとき——そしてこれとはかく資本が存在することをやめ、生産物がもはや他人の剰余労働（surplus labour）に対する請求権をあたえなくなることの帰結なのだが——、そしてその上資本がもたらした生産諸力の発展が考慮されるならば、社会は六時間が必要な剰余（abundance）を、現在十二時間で生産するよりもより多くのものを生産し、同時に万人は六時間の『自由に処分できる時間（disposable time）』すなわち真実の富をもつにいたるであらう。その時間は、直接生産的労働に吸収されるのではなく、享受（enjoyment）、閑暇のために（自由のこされ）、かくて自由な活動と発展との余地をあたえるものである……。

労働の時間（time of labour）は、交換価値が止揚されてしまった時でも、やはり富を創造する実体であり、富の生産が必要とする費用の尺度である。しかし自由な時間（free time）、自由（free time）に処分できる時間（disposable time）は富そのものである。すなわち一部分は生産物の享受のための、一部分は自由な活動（free activity）——それは労働が自然必然性によるものであれ人間の意志に基づく社会的義務によるものであれともかく達成されなければならない外的目的の強制によって規定されるのはことなる——のためのものである。

労働時間そのものは、主人と下僕 (master and men) 等々の社会的対立が止揚されるとともに、正常な分量に制限され、さらにもはや他人のためではなくわたくし自身のためになされることによって、真実に社会的な労働として、最後に自由に処分できる時間の基礎として、これまでとは全くちがった性格をもつものであるということ、そうして自由に処分できる時間の主人である人の労働時間は労働する獣のそれとははるかに高い性質をもっているにちがいないということは、いわずともあきらかである。⁽⁶⁾」

(一) フルタイムルはつものとなりである。The Source and Remedy of the National Difficulties, deduced from Principles of Political Economy, in a Letter to Lord John Russell. このパンフレットの著者が誰であるかをマルクスは知らなかったと思われるが、その後の研究者にとつてもこの点をきとめることはできなかった。『要綱』の編集者も“Verfasser nicht ermittelt”と告白してゐる (S. 1071)。フォックススウェルはアントン・メンガーの『全労働収益権史論』の英訳本 (一八九九年) の附録につけたイギリス社会主義文献目録の中で本書をあげたが、この著者はジョン・グレイではないかと推定してゐる (p. 204)——森戸辰男訳 (一九二四年) の巻末につけられたその複製二一ページ参照——が、わたくしもこの点をたしかめるためにロンドン滞在中フォックススウェルの蒐集したゴールドスマス・ライブラリその他でいろいろ探索した。その結果ディルクの孫のサー・C. W. ディルク Sir Charles W. Dilke (1843—1911) が祖父の文章をみづから編纂・公刊した二巻本 (The Papers of a Critic, selected from the writings of the late C. W. Dilke with a biographical sketch by his grandson, Sir C. W. Dilke, 1875, 2 vols.) の巻頭に書づける追憶記の中で祖父がこのパンフレットの作者であるとのべていることをきとめることができた。cf. *ibid.*, vol. I, pp. 14—15, 66. もつともこの二巻本には文芸評論家としてディルクの諸論稿があつめられていて、このパンフレットは収録されていない。なおディルクの生涯や業績については、彼が編集してゐた文芸雑誌を研究したつぎの書がかなりくわしくあつており、このパンフレットのことにも言及してゐる。Marchand, L. A., *Athenaeum, a mirror of Victorian culture*, 1941.

(2) このノートは現在アムステルダム の社会史国際研究所が所蔵してゐるマルクスの手稿類の中にある (分類番号 B 49)。わた
マルクスの経済本質論に関する一考察 (杉原)

くしは一九五七年に同研究所で閲覧したが、そこには十数冊の地代論関係の著書からの抜き書きにまじって、このパンフレットから十種の抜き書き——『要綱』や『剰余価値学説史』に引用されているもの——がみいだされる。

- (3) *Grundrisse*, S. 301, S. 594.
- (4) Marx, K., *Theorien über den Mehrwert*, 3 Teil, Dietz, 1962, S.236.
- (5) Marx, *ibid.*, S. 252.
- (6) Marx, *ibid.*, S. 255. なおこのパンフレットについては、『資本論』第二巻へのエンゲルスの序文を参照。(Das Kapital, II SS. 12—13)

五

ところで『要綱』のなかに脈動しているこのような根本思想は、もとより『資本論』の中にも貫流しているのであって、さきに言及したベーレンスの講演も、最後は『資本論』第三巻の中にある有名な一節、すなわち「自由の領域は、事実上、窮迫と外的合目的性とによって規定される労働がなくなるところではじめて始まる」という文章ではじまる一節⁽¹⁾の引用をもって結ばれている⁽²⁾。しかしこの点は前著でかなりくわしく考察しておいたので、ここでは初期マルクスの著述の中から、この点に関してとくに注目されるべき箇所を一つ紹介しておきたい。われわれはそれによって、本稿でとりあげたマルクスの思想が、一八五〇年代においてはじめて生誕したものではなく、彼が経済学の研究に着手した発端において、すでにその基礎がおかれていたことを、しることができようであろう。

その箇所というのは『聖家族』(一八四四年)の第四章(四)プルードンの批判的傍註第四である。マルクスは(四)でエドガー・バウアーのプルードン批判、いわゆる「批判的批判」を吟味しているのだが、かれは批判的傍註(四)で、エドガーが *valeur* を *Geltung* と訳し、これを法律原理の効力にも労働生産物の価値にも同じ意味で適用するという詭

計を用いてプルードンを批判している点をついた後、つぎのようにならべている。

「あるものの生産についてやされる労働時間が、そのものの生産費のうちにはいること、ものの生産費とは、それについてやされる場所、つまり、競争の影響を度外視すれば、それで売られるところのものであるということ。

この洞察は批判的批判にもわからないはずがない。……プルードンは人間の活動の活動としての直接的定在である労働時間を、労働賃金と生産物の価値決定の尺度とすることにより、古い経済学では資本と土地所有の物的な力が決定的であったのに対し、人間の側面を決定者とした……。

だが批判的批判がいうように、しばらくのあいだ、プルードンが労働賃金の前提から出発しないものとさえしておこう。批判は、あるものの生産に必要なとされた時間が、そのものの「ゲルト・ウング」の本質的な一契機でなかったことがあつてあつたと信ずるのであろうか。批判は時間がその高価さを失うと信ずるのであろうか。

直接に物質的な生産についていえば、あるものを生産すべきであるかいなかの決定、つまりそのものの価値についての決定は、実質的にはその生産に費やされる労働時間にかかるのである。なぜなら、社会が人間的に発達を上げる時間をもっているかどうかは、時間にかかっているからである。

精神的生産についてさえ、もし私がほんとうに分別のある行動をすれば、ある精神的な作品の範囲、構想、計画にかんして、その生産に必要とされる時間を考慮してはいけなからうか。でなければわたくしは、すくなくとも、わたくしの観念上の対象が現実の対象にならないという危険をおかすことになり、したがって想像上の対象の価値、つまり想像上の価値しかえられないことになる。

経済学的立場における経済学の批判は、人間の活動の一切の本質規定を認めるが、疎外され外在化された形式に

おいて認めるにすぎない。この批判は、たとえば時間が人間的労働にたいしてもつ意義を、ここでは労働賃金、賃労働にたいしてもつ意義にかえる。」⁽⁴⁾

この一節はレーニンが一八九五年に『聖家族』をよんでノートしたとき、ここは非常に興味がある（マルクスは労働価値説に近づいている⁽⁵⁾）と註記したことで有名であるが、われわれはこの文章の中にマルクスの労働価値説の基礎によつたわる経済本質論を十分よみとることができであろう。すなわち、かれはここで「時間が人間的労働にたいしてもつ意義」を、「疎外され外在化された形式において」ではなく、より本質的な観点から問題にしているのである、その見地からマルクスは、物質的生産であれ精神的生産であれ、「あるものの生産に必要とされた時間」がそのものの価値の「本質的な一契機」であること、それは時間こそ社会が自己を人間的に形成するための基本的な素材だからであることを主張しているのである。したがって、「時間の経済、すべての経済は結局はそこに解消される」という『要綱』の文章をささえている思想と、それは全く同一のものであるといつてよいであろう。このような量的な労働観と、『経済学・哲学手稿』の疎外論や『ドイツ・イデオロギー』の分業論にみられる質的な労働観⁽⁶⁾とを、統一的に理解することが、初期マルクスの思想を正しく把握するために最も重要であるとわたくしは考える⁽⁷⁾のだが、この点の詳論は別の機会にゆずり、今はただ問題の所在を指摘するにとどめておく。

(1) Marx, K., *Das Kapital*, III. S. 873.

(2) Behrens, F., *ibid.*, S. 17.

(3) 杉原『ミルトマルクス』第一部第四章を参照。

(4) Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 2, Dietz Verlag, 1957. SS. 52. 石堂清倫訳、大月版全集第一巻。岩波文庫

版八三―八五ページ。ローゼンベルクの遺著『十九世紀四〇年代におけるマルクスとエンゲルスの経済学説の発展の概説』（一九五四年、副島種典訳『初期マルクス経済学説の形成』一九五七年）は本文のなかでこの文章をとりあげていないが、遺稿編集者のブリュエミンが補遺の中でこの文章のはじめの部分（「あるものの生産に……わからないはずがない」）を用いたあと、「重要なのは、マルクスがこの引用文で商品を生産するのに費される労働時間の意義をとくに強調していることである」とし、これは、一八四四年の『経済学ノート』におけるリカードウ評註での労働価値論の否定とくらべると、「労働価値論を完全に承認する方向への一歩前進であった」とのべている。（副島訳三九三―四ページ）。しかしブリュエミンは上掲の文章のあとの方にはつきりあらわれているところの、マルクスの経済本質論を全く無視し、この本質論がかれのここでの労働価値論的思考をささえていることをのみがしている。

(5) レーニン『哲学ノート』大月書店版全集第三八巻・九ページ。

(6) 杉原「労働疎外論とその発展」（『経済セミナー』一九六三年六月号）参照。

(7) 『手稿』や『ドイツ・イデオロギー』のなかでも、労働時間の問題が無視されているのでは決していないことについては、前著『ミルとマルクス』で指摘しておいたとおりである（一〇九―一一ページ参照）。マルクスが『手稿』のなかでシュルツの『生産の運動』（一八四三年）からつぎの文章を賛同的に引用しているのは、さきにも『要綱』におけるディルクの引用と比較するとまことに興味ぶかい。「最後になお、むかしといまとの通常の労働時間に注意しなければならぬ。……民衆は、精神的にもっと自由な発達をとげるには、……肉体の奴隷であってはならない。そのためには、まずもって、精神的にも創造しかつ精神的にも享受できる時間がかれにしなければならない。労働機構の進歩はこうした時間を獲得してくれる。……機械の改良による時間の節約にもかかわらず、工場における奴隷労働の継続時間は、人口の大多数のものにとつては、もっぱら延長されるばかりである。」Marx Engels, *Kleine Ökonomische Schriften*, Dietz Verlag, 1965, Ss. 54―55. 三浦和男訳、青木文庫三八―四一ページ。なお、傍点の部分はシュルツの原典そのものでもグジュヘルトで印刷されている（Schulz, W., *Die Bewegung der Production*, Zürich und Winterthur, 1843, S. 67.）。この点については重田「マルクスのパリ時代の経済学研究に関する資料的覚書」（本誌本号所収）第四節の本文と註(2)を参照。